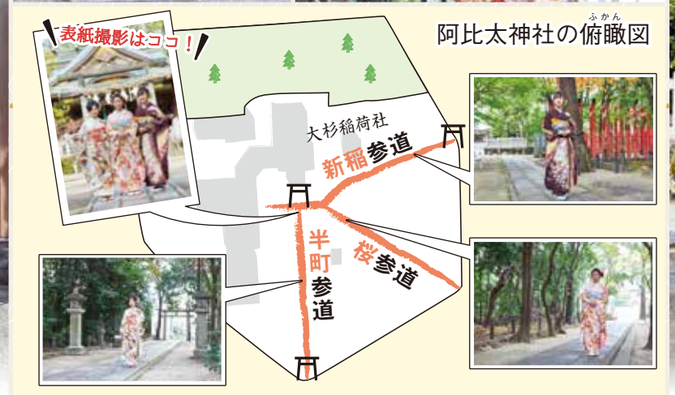
特集巻頭

めぐる季節に豊穣を祈る

阿比太神社

『阿比太神社』は延長5年（927年）に編纂された『延喜式神名帳』にもその名を連ねる由緒正しい神社だ。古くから地域の人々の手で支えられてきた歴史について、宮司の内藤さんに話を聞いた。



阿比太神社の俯瞰図

民話に伝わる神社への愛着

阪急箕面線「牧落駅」から15分ほど歩くと、住宅街の真ん中に鎮守の森を背負う神社が現れた。『阿比太神社』（以下、同社）は長年厚く信仰されているこの地域の氏神様だ。かつては半町、桜、新稲という3つの村の中間にあり、今も各村の名前がついた参道が三方向に伸びている。

鳥居も3基あり、2基は半町と新稲の参道入り口に立つ。そして桜の参道にはなぜか鳥居がなく、残る1基は本殿前にしめ縄を掲げて立っているという珍しい造り。鳥居の謎について宮司の内藤景治さんは、江戸時代から伝わる民話を語ってくれた。

「阿比太神社 鳥居争い」

『阿比太神社』が〝牧の大宮さん〟と呼ばれていた頃の話。半町、桜、新稲の村人たちは「牧の大宮さんはうちの氏神様や」と互いにゆずらず、祭のたびに喧嘩が絶えなかった。そこである夜、村の長たちが集まり「三村で競争をして、もっとも早く立派な鳥居を奉納した村が祭を取り仕切ることにしよう」と決めた。これを偶然耳にしたのが、お酒を飲んで集会所の床下で寝ていた桜村の大工、九郎兵衛さん。さっそく仕事に取りかかり、あっという間に本殿の前に黒木（クヌギの生木）の鳥居を建ててしまった。一夜にして現れた大きな鳥居に村人たちはびっくり。以来、桜村が祭を取り仕切ることになったという。

村同士の対抗心と、人々が同社に寄せる思いの強さがわかるエピソードだ。「今でも必ずご自分の地域の参道から入ってくる方がおられます」と内藤さんは話す。

阿比太神社　宮司
内藤景治 さん

「ひとつの説ですが大昔は宮司がおらず、地域に守られてきたお宮さんだったのかもしれません。だからこんな民話が生まれたのかも」と内藤さん

変わらない存在であることの難しさ

同社の御祭神である素盞嗚尊（すさのおのみこと）は全国で崇敬されている神様だ。多くの神話に登場し、ある時は英雄、ある時は荒ぶる神、また夫や和歌の元祖など多彩な性格を持つ。そこから武道、天候、縁結び、夫婦円満、学問と幅広い神徳が信じられるようになった。求められる神徳は地域によって変わる。たとえば農耕地帯なら天候をあやつる農耕神と崇められ、人口が多く病が流行りやすい都市部では病除けの神となる。まるで人々の願いを映す鏡のようだ。

かつて同社と三村の周りは広大な農耕地だった。「春には『節分祭』、『祈年祭』、『春祭』で豊作を願い、秋には『秋季例大祭』と『賑わい祭』、『新嘗祭』で豊穣に感謝する。祭事の多さからいかに農業が大切だったかがわかります」と内藤さん。

祭事の日取りはさかのぼれないほどの昔から変わらない。「毎年同じ日に、同じ儀式を、同じように続けることがとても大切なんです」と内藤さんは話す。その土台には「時間は過ぎ去るものではなく、巡り巡ってくり返すもの」という日本の伝統的な時間意識がある。いつの時代も変わらずそこにあり続けることが、人々の心に安息をもたらしてきた。

とはいえ時代の変化にどう対応するかは難しい問題だ。「変えるとしたらどう変えるのか、決して変えてはいけないものは何か。常に見据えなければと思っています」と内藤さん。

一年をふり返り気持ちを新たに

『延喜式神名帳』の時代から時を重ねて現在。同社と地域の関わりは続いている。毎年12月23日には旧桜村にあたる箕面市桜から氏子のみなさんが集まり、本殿前の鳥居のために新しくしめ縄作りをする。九郎兵衛さんの時代からきっと変わらない光景だ。年越しの瞬間には多くの人が初詣に並び、深夜2時頃まで行列が続くという。

大昔とは変わったこともある。日曜以外の毎朝行われる「早朝体操会」と「太極拳同好会」では、地域住民からの呼びかけで境内を貸し出している。信仰とは違ったところで、声をかけ合うコミュニティの場になっているのだ。参加者による清掃活動のおかげで、境内周辺はいつもきれいなのだそう。「地域の方の気持ちがあってこそ、神社は維持していけるのだと思います」と内藤さんは語った。

あと数日で一年が終わり、また新しい一年が始まる。初心に返る気持ちで訪れてみてはいかがだろう。

取材協力

阿比太神社

住所：箕面市桜ケ丘 1-8-1
TEL：072-721-2096
URL：http://abita.or.jp/

12月31日　年越しの大祓

宮司による茅の輪くぐりの先導と大祓式
①11:00 ②13:00 ③15:00 ④17:00
※開門中は上記時間外でも、参拝や茅の輪くぐりは可能

阿比太神社の一年

大杉稲荷社（末社）
京都伏見稲荷大社の三之峯から大杉稲荷大神の分霊を奉祀したもの。五穀豊穣、商売繁昌を担う

春　豊作を願う

- 1月1日 元旦祭
- 15日 とんど
- 2月3日 節分祭・大護摩火焚祭
  立春の前日に向こう一年の災厄を払う

- 23日 祈年祭
  「年」は稲の意味。稲作が始まる春の始めに五穀豊穣を願う
- 4月23日 春祭・稲荷祭

夏　厄払い

- 6月30日 夏越し祓

秋　実りに感謝する

- 秋季例大祭の前の日曜日 賑わい祭
  一年でもっとも盛大な祭。氏子のみなさんの協力で神輿太鼓が5つの地域から宮入りし、神楽を奉納する。屋台の出店もあり大勢の参拝客でにぎわう。

- 10月23日 秋季例大祭
  今年の豊作に感謝する
- 11月23日 新嘗祭・もみじ祭
  春の「祈年祭」と対をなす秋の収穫祭

冬　厄払い

- 12月31日 大祓式

農耕に関わる春と秋の祭と、夏と冬の厄払いがそれぞれ対になっている。数百年の昔から守り続けてきた暦には、「時を経て原初の神様とくり返し出会う」という意味が込められているそう